

(1) からつづく

「テキストの発生」は賛美されません。というのは、それとは反対に、ある産業、考察、修正の対象とは何か等々が示されるからです。デリダが流行らせた、作品を「脱構築する」という用語を用いることさえできるでしょう。

ラカンをそれを気に入ったのでしょうか？「テキストの発生」はラカンの時代にはすでに存在していました。しかし、その後発展はしませんでした。私はラカンがジッドについてのテキストで書いていることに思いを馳せます。エクリの 742 頁です。ジッドは紙の束をよく手にもっていました。ラカンはある新しい価値の印が存在している、書籍の市場にその価値は導入された等と書いています。

それは紙の束のことです。ラカンが言うには、印刷物が抑圧してしまった手稿というものが、作品における利害関係者として再び活気づくのです。そしてラカンの編集のあと、手稿を与えたポンジュについて考えるなら、それ以上うまく言いあらわすことはできないと思います。

ジッドが注釈、とりわけ精神医学の利用のためにこれらのやっかいなものを入念に準備したことにラカンは注意しています。そして精神科医ジャン・ドレーがジッドについて書いたとき、ある意味、それはすでにジッド自身により予見されていたことだったのです。

たとえばフロベールについてもそう言えるでしょう。彼はその小説の構築にかかわるすべての軌跡を保管しました。私はそれをどこだったかで、20000 頁のフロベールの手稿を読みました。まだ探検されねばならないものです。それらはやっかいなもの、あるいは小説の基礎の構築なのでしょう。

だからこんな小さな遊戯があり、ひとたび作品の部分をなすものとして研究され認められるならば、シャトーブリアンが例えば絶対に自分の手稿を破壊したいっぽう、書き手はそれを理解しているのです。

逆にスタンダールは手稿を保管していました。しかしそれは彼のなかではすべては手稿であるからで、彼は作品全体を手で書き、それを出版しませんでした。

いいでしょう。以上、私がインスピレーションされたことです。少し長くなりましたが。でもあなたの質問がインスピレーションを与えました。ありがとうございます。

司会者) ではキャロル・デバンブリッチ・ラサーニャさんどうぞ。

ラサーニャ) バーバラ・カッサンは 432 頁で、ラカンとのギリシャ語を巡る対話は楽しかったし、こちよく、喜びの源だったと言っています。私もこのあまり普通ではない形式の本は、楽しくこちよく喜びの源だと思います。

この本は、解釈としては、それを考え出した人物の敏捷性の結果だと思います。

その人物は正しくタイピングしています。その点においてもまずジャック＝アランに感謝したいです。そしてあなたをこの企画のなかで手伝った人たちにもお礼を言います。

ひとことあなたがどのように制作したのか、始めたのか教えてもらえますか？この本を手にすることができるのは大きな喜びです。

二つ目の質問は、いわゆる患者呈示がふたつ、ラカンがサンタンヌ病院で行ったものが収録されていると言われます。それはボワイエ嬢の症例です。それにつづくディスカッションにおいて、ラカンは想像的パラフレニーで彼を取り囲む精神科医と会話することをためらってはいません。そしてラカンはメンタルの病の限界を考える難しさを問うことをためらっていませんね。

私たちの時代、激しく脱病理化した時代では、このようなあまりに繊細で、丹念で、現代的な臨床に読者を沈めるあなたの考えとはどのようなものなのでしょうか？

以上が私の質問です。

ミレール）それが現代的であるとも言うのは、楽観主義的ですね。私はニーチェの意味でこれは非現代的であるとむしろ言いたいです。つまり不都合なと訳されもする意味で、現代性にもってくるのには少し努力が必要ということです。

あなたは賛成だと思っていますし、おまけにのちにペネロープ・ファイから聞くだらう三つ目の質問と同じ方向の質問ですね。じつは質問はふたつです。ふたつ質問をした唯一のひとですね。

本当に6月10日に、私はそれを集めました。この本の件における私の行動を形容するのに、あなたは敏捷性という言葉をつかってとても褒めてくれました。この語にとっても私は誇りをもつが故に、思い出があります。あるとき「テレビジョン」という彼のテキストのなかでラカンが言ったことですが、解釈は俊敏でなければなりません。

それは迅速性です、もちろん、敏捷さというのは。しかしニュアンスがあるのです。ロベール辞書で調べました。巧みさ、繊細さ、機転、器用さというニュアンスがこめられています。それは策略にまで及ぶ可能性があります。策略、それは存在しませんでした。告白しなければなりません、アルベルティに話したか分かりませんが、それは気晴らしとして始まったのです。

1901年生まれのラカンの死後四十年になり、つまり生誕120歳になるところでしたが、その年の初めには、私はまったくもって考えていませんでした。

私は別の事を考えました。たぶんそれは誕生日四月十三日でした。これを巡って本を出版しようと

は考えていませんでした、5月が来るまでは、です。いや、誇張しているでしょうか？

私が話した三つの作品は、あなたが送ってくれた時には、それは誕生日の本のためだと言っていましたよね。それはいつだったかな？3月だったでしょうか。

そうです、ラカンの誕生日の前でした。私はぼんやりしてました、でもぼんやりしすぎというわけではありませんよ。ふつう、私は前の年に準備するものなのです。

ですから現れるまでに6か月もかかっていませんね。バルタザール・グラシアンが言うように、ラカンの読解は早くきちんとしなければなりません。早くきちんとというのは、きちんとだけよりもいっそう良いのです。

私にとり、最初に本当に出版したいと思った中心にあるのは、グローリアとの対談です。彼女は沈黙を受肉していて、ラカンについて語りませんでした。ラカンの分析主体たちがひとりひとり、懇願してもだめだったのです。こういうのはグローリアはラカン家の扉を彼らに開けていたからです。

そして彼女はときおり打ち明けてくれました。ラカンが老いるに従って、彼はますます短いセッションを行っていたということです。ですから分析主体たちは、彼の寝椅子に完全には横たわる機会を見つけられないまま、ときにグローリアに打ち明けることでセッションを補っていました。彼女はしかし、何も打ち明けてはいませんでした。

グローリアは口をきかないひとでした。たぶん2009年だったと思いますが、言いませんがあるはっきりとした理由によって、マイクの前で彼女に返答をお願いしたのです。それが実は唯一の機会でした。

彼女とジュディットと私はディナーを一緒にとったのですが、—グローリアの夫も一緒でしたね—、頼むときに、彼女に言ったのです。今晚いっしょに夕飯を食べることを受け入れてくれませんか？その時ラカンについて質問するから答えてほしい、私は録音しますよ、と言ったのです。彼女は受け入れました。それが唯一OKが出たときでした。それはサン・クルー・ド・リルでの、正統なラカンのひとつの肖像です。

この本にあるテキストは、統合的なものではないと言わないようになります。私が出版したかったのはそれなのです。私は袖の下に隠していました。というのは一般の人たちに委ねるのは、あまりにまだ、内密すぎるように思えたからです。

そして、時期が来たと感じたのです。グローリアは残念ながら亡くなりました。ジュディット、グローリアの夫のアブドールもそうです。じつはあの時の4人のうち私が唯一の生存者になります。

そして私はこれを一般の人に委ねたいと思ったのです。それからジェズスとアミシアによって補完したあとで、ギットランクール（別荘）のラカンになります。それは静かで、魅力的なラカンです。命令をせず、尊重し、もし彼がひとりの場合は、彼らとディナーをしたがりました。そう彼は言いませんが。

彼は彼らの小さな家に住みました。ディナーの時になるのを待ち、彼らはラカンを招待しました。これらのシーンはまったく魅力的です。

もちろん、ジェズスとアリシアは、彼らもまた沈黙学校で育ちました。しかし私が彼らを呼んだとき、アリシアを呼んだとき、彼女はすぐに賛成してくれました。

家族としては、分割された家族です。というのも最初の結婚でできた子どもたちは、カロリーヌ、ティボー、シビルがいます。そしてジュディットが二番目の結婚でできた唯一の子どもです。ラカンとシルヴィー・バタイユの子どもです。

ティボーとジュディットのあいだには絆があります。ティボーは最近打ち明けてくれました。15、16歳の時、彼はとても愛していた、と。でもラカンの相続のときにあまりにも家族が分裂していたのです。よくあるように。そして遺産相続には10年がかかったということです。

私はこの本を、そういう理由で家族の仲直りの印として出したかったのもあるのです。カロリーヌ、シビル、ファブリスという子どもたちは、この本に登場することを承諾しました。ティボーはすでにジュディットと仲直りをすませている、父とのとても感動的なテキストを書いてくれました。

シビルは国家機関にいて、同時に作家ですが、すでにグラセール社からふたつの文学テキストを出版していました。彼はすばらしいテキストを書いてくれました。それはラカンがカロリーヌのほうの孫たちを訪問したときのことについてです。カロリーヌ自身は亡くなっていますが。

ファブリスは、大衆向け作品の作家で、彼は一枚の写真をくれることで満足しました。しかしそこには出版のミスがあります。それがちゃんと出るにはアート紙の上に出さなければいけないのです。でも普通紙に出してしまいました。だから輝きが失われてしまいましたね。カロリーヌ、その母、ラカン、そして小さい頃のファブリスの輝きが。

私の子どもたちに話をうつしましょう。彼らは非常に慎重でした。彼らはラカンを良く知り、ギットランクールで毎週彼に会う機会を持っていましたが。それは神話イメージとの関連では、思いがけないラカンであると言えるでしょう。彼の特異なところは、とても古い根を持っていることに気付かれると思います。

そこにある資料は多くの場合は唯一の場所から来ています。じつは、そのような種類の資料を多く

は私はもっておりません。息子に言いました。講義に行き、日中を過ごして、ラカンの紙類を探そう、と。というのは40年ものあいだ、そこらへんに紙類はあったのです。私は近づきたくはなかったのです。彼が私に残してくれたこの置物—私がしたいことをそれを使ってしなさいというミッションを彼は与えてくれました—を脱神性化するのが、嫌だったのです。

息子はすぐにラカン自身が保管していた段ボールに手をのばしました。とりわけ147頁にあります。私にとりまったく抵抗しがたいほど魅力あるもの、つまりスタニスラス高校の校長先生の評価があります。いまなおそこは宗教的施設です。スタニスラフの校長は17歳のラカンを観察していました。彼はジャックは「知的で変だった（変な、異様な bizarre）」と言っています。だから私は抵抗しがたいほど魅力あるものと言ったのです。彼の勉強はおまけに不規則的でした。ラカンの、規則を脇におく外交手腕が、嘆かわしいとされています。実のところ、ラカンについての意見とはどんなものかを、これ以上うまく要約はできないでしょう。実は、彼は、フロイトがきちっと設立した、精神分析の国際団体のあらゆる規則を曲げてしまいました。

彼は自身の精神分析の実践を持ち、それを放棄しませんでした。実は、その同時代人の多くのひとに会いました。親しい人たちにもですが、他の人のような誰かとして会ったのではありませんでした。こういって良ければ、変な人として写ったのです。

そして彼のパーソナリティは17歳で作られたと、分かります。ラカンはジッドについてそのパーソナリティは25歳で作られたと言っていますが、まさにその意味では、ラカンのパーソナリティは17歳で作られたという感覚をもちます。

もう少し話しましょうか。ラカンのポジションというのは、まったく伝統的な、たとえばストア派の知恵というものとは反対物です。セネカを例にあげるなら、賢人とは民に対して己の外見を一致させなければならない、つまり賢人は死すべき者たちと同じように振る舞わなければならないとしています。その心の内側では他者をみな区別していたとしても、です。（・・・略）

みなさんを困惑させないためにこれ以上例をあげませんが。私はラカンについてつねにこう思っていました。彼は逆であるなど。つまり彼はその外見とパラドックス的な思考によって、人民から区別される存在だと思っていました。

しかし一方、プライベートでは、ラカンは結局ある仕方で、他の人と同じような人でした。ただし人々の平均よりももっと優しくて注意深かったと思います。（つづく）